

## 将来予測について

### 21世紀末の予測：

気候変動に関する政府間パネル（IPCC）第5次評価報告書※1で用いられた2つのシナリオ（RCP2.6とRCP8.5）に基づく、20世紀末と比べた21世紀末※2の予測を記載しています。

#### RCP2.6シナリオ：

将来の世界平均気温が、工業化以前※3と比べて約2°C上昇することが想定されているシナリオで、

#### 「2°C上昇シナリオ」

と表記しています。

#### パリ協定の2°C目標が達成された世界

に相当し、IPCC第6次評価報告書では、SSP1-2.6シナリオに近いものです。

#### 温暖化の程度に応じた予測：

20世紀末※2では100年に一回の頻度で発生していたような大雨が、工業化以前※3と比べて世界平均気温がそれぞれ1.5°C、2°C、4°C上昇した場合、どれくらいの頻度で発生するかを記載しています。なお、ここでは1日の降水量（日降水量）を解析しています。また、2°C上昇シナリオと4°C上昇シナリオにおいて、1.5°C、2°C、4°Cそれぞれの温度上昇が見込まれる、およその年代をそえて解説しています。

※1 最新のIPCC報告書は第6次評価報告書ですが、日本付近の予測で参考可能な結果の多くは第5次評価報告書に基づくためです。

※2 「21世紀末の予測」で用いる、20世紀末は1980～1999年（海面水温は1986～2005年）の平均、21世紀末は2076～

2095年（同、2081～2100年）の平均です。「温暖化の程度に応じた予測」では、20世紀末は1981～2010年です。

※3 工業化以前は1850～1900年の平均です。

## 全国の情報はこちら

### 日本の気候変動2025

（文部科学省・気象庁、令和7年3月公表）



日本の気候変動の現状と  
予測に関する最新の知見を紹介  
気象庁ホームページからご覧ください↓



## 気候変動の影響と適応

### 気候変動適応情報プラットフォーム (A-PLAT (国立環境研究所))

気候変動は様々な分野に影響を及ぼします。具体的な影響やそれに対応するための適応策については、A-PLATも参照ください。



A-PLATの  
ホームページ

気候変動適応

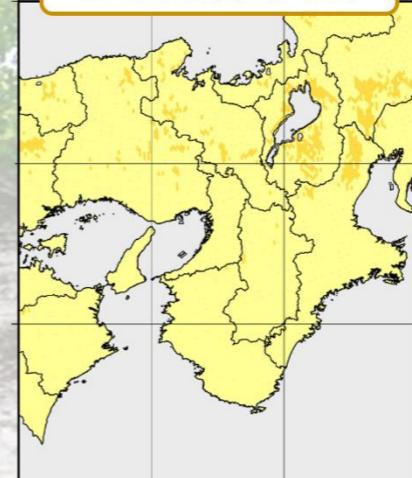
検索

# 大阪府の気候変動

## 気温の上昇



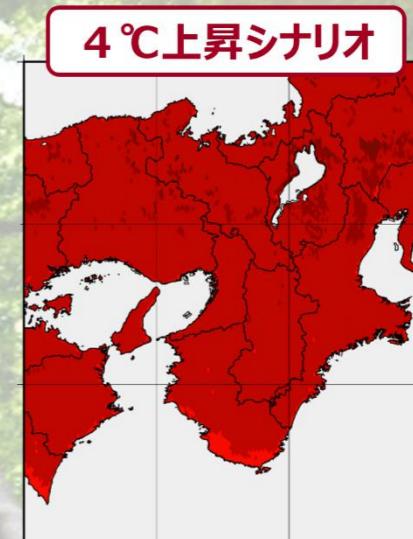
### 2°C上昇シナリオ



## 大雨の増加



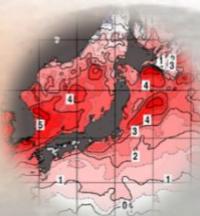
### 4°C上昇シナリオ



## 年平均気温の将来予測（21世紀末）

20世紀末からの上昇量（シナリオ等の詳細は裏面参照）  
狭い領域の変化は不確実性が大きいため、都道府県程度の広範囲の変化に着目ください

## 海面水温の 上昇



## 台風強度の 増大



このリーフレットでは、「日本の気候変動2025」（文部科学省・気象庁）に基づき、これまでの気候の変化と将来予測に関する情報をまとめています。

近畿地方の気候の変化については、気象庁ホームページからもご覧になれます。



気象庁ホームページ「日本の各地域における気候の変化」

令和7年3月  
大阪管区気象台



大阪管区気象台 大阪府大阪市中央区大手前4-1-76 TEL: 06-6949-6653

## 気温の上昇

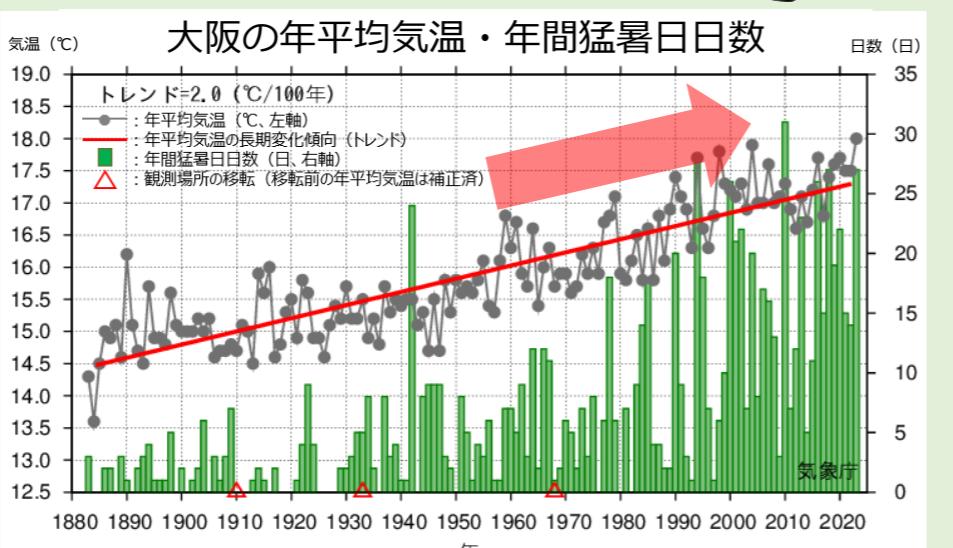
### これまでの変化

100年あたり  
**2.0°C**上昇\*

\*右のグラフのデータから算出した  
100年あたりの平均的な上昇率です。

各要素の最新の変化傾向は、A-PLAT「気象観測データの長期変化の傾向」をご覧ください。

<https://adaptation-platform.nies.go.jp/data/jma-obs/index.html>



### 21世紀末の予測

大阪府の年平均気温は、20世紀末と比べて、  
**2°C上昇シナリオ**で約**1.4°C**、**4°C上昇シナリオ**で約**4.2°C**上昇

年間猛暑日日数 4日 → 約**11日** / 約**35日**

年間熱帯夜日数 11日 → 約**24日** / 約**65日**

日数は左から、大阪府平均の20世紀末の観測値、21世紀末（2°C / 4°C上昇シナリオ）の予測値

猛暑日は日最高気温が35°C以上の日です。

熱帯夜は夜間の最低気温が25°C以上の日を指しますが、ここでは便宜上、日最低気温が25°C以上の日を熱帯夜として扱っています。

### 海面水温の上昇



### 21世紀末の予測

四国・東海沖の年平均海面水温は、  
20世紀末と比べて、

**2°C上昇シナリオ**では約**1.01°C**、  
**4°C上昇シナリオ**では約**3.04°C**上昇

四国・東海沖が示す海域は、気象庁ホームページ「海面水温の長期変化傾向(日本近海)」を参照ください。

### 台風強度の増大



### 将来予測<sup>※1</sup>

日本付近の台風強度<sup>※2</sup>は**強まる**  
台風に伴う降水量も**増加**

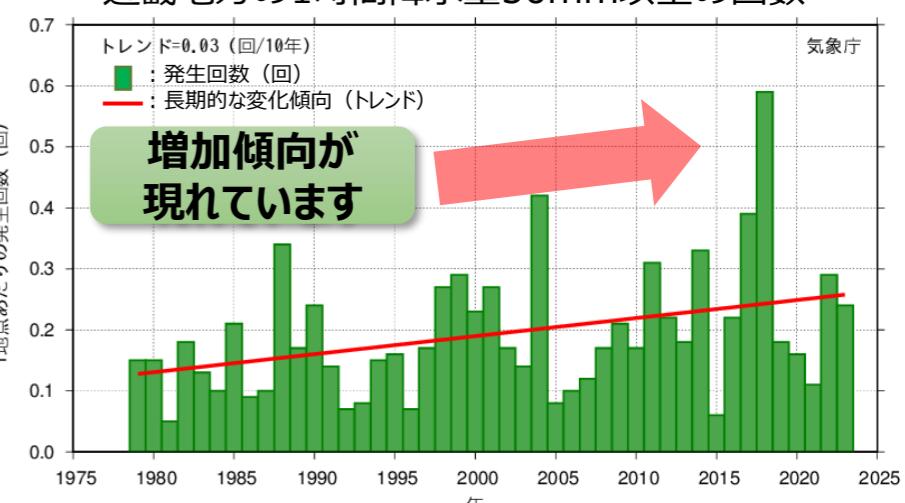


※1 溫暖化に伴う台風の変化を解析した様々な研究結果に基づきます。  
※2 中心付近の気圧または風の強さ

## 大雨の増加

### これまでの変化

近畿地方の1時間降水量50mm以上の回数



### 21世紀末の予測

傘は全く役に立たなくなる  
ような降り方です

近畿地方の1時間降水量50mm以上の年間発生回数は、  
20世紀末と比べて、

**2°C上昇シナリオ**では約**1.8倍**、**4°C上昇シナリオ**では約**2.7倍**に増加

！ 土砂災害や洪水等の災害リスク増加

各シナリオにおける  
おおよその年代

2°C上昇シナリオ  
(SSP1-2.6)

4°C上昇シナリオ  
(SSP5-8.5)

### 温暖化の程度に応じた予測

20世紀末には100年に一回しか起らなかった大雨<sup>※1</sup>が**より頻繁に**

近畿地方  
の予測

温暖化の程度

1.5°C上昇

2°C上昇

4°C上昇

20世紀末

2023-2042年頃  
2018-2037年頃

※2  
2032-2051年頃

2075-2094年頃

100年当たり  
の発生頻度

1回

約1.5回

約1.6回

約2.5回

観測データ<sup>※3</sup>による推定では、  
100年に一回の大雨（日降水量）  
は、大阪では約226mmです。  
温暖化が進むと、こうした大雨が  
より頻繁に発生します。

※1 ここでは日降水量に基づく結果を示します。  
※2 2031-2050年頃に2°C上昇となる可能性はあります。  
※3 1976-2023年のうち利用可能な観測データです。

詳しい情報は、気象庁ホームページ  
「極端現象発生頻度マップ」をご覧ください。

